

第51回 中高校生の吃音のつどい(お料理教室)

5月1日(日)、小学生14人、中学生4人、高校生10人、兄弟姉妹5人、ご両親22人、スタッフ34人の計89名が参加。豊島区立池袋小学校 家庭科室&ことばの教室にて開催。午前は皆でお料理(チリコンカン&トルティーヤ、わかめスープ)。食べた後はグループ別の話し合い。今回、私は初めて全体リーダーを経験しました。担当して感じたことは、自分の至らなさと参加者の方々・周りのスタッフの温かさです。つどいの延期という予想外の事態が生じましたが、その出来事を通して、どれほど参加者の方々がつどいを心待ちにしておられるか、そしてスタッフがつどいにかかる意気込みが強いことを知りました。延期のご連絡をすると、参加者の方々は一様に落胆され、また私達スタッフの身を案じていらっしゃいました。その時私はとても温かい気持ちになりました。また、スタッフの方々もつどいの実施を強く願い、協力して下さいました。反省点は多々ありますが、今回無事に開催できたのは、皆様1人1人の協力のおかげです。何よりも私は皆様から大きなエネルギーをいただきました。(リーダー: 富田佐綾、高島聖宣、中西智也)

S.A(大学3年)

つどいに参加させていただきありがとうございました。とても充実した時間を過ごすことができました。

皆でのお料理教室はもちろん、同年代の人達との話し合いはとても有意義なものになりました。その話し合いでは、人によっては吃音に対する価値観も違う。どうとらえて行くかも違うという事を知ることができて、とても参考になりました。

もっと早くから参加してたらとも思いました。この機会のおかげで友達も増えました。今度からはスタッフとして参加ということになるとと思いますが、その場合、どうすればいいのでしょうか？



R.A (S君のお母さん)

子供の吃音に対しては、本人が小学校を卒業する時、「僕はこのままでいい」と言い、私も、親はいつまでもかばってやれない、強くなって欲しい…等の思いから、何もせずにあえて吃音に触れずに来ました。内心は心配で、恥ずかしい思いはしていないか、からかわれてやしないか、いじめられてやしないか…常に気になっていました。子供が大学生になったある日、自分から「辛い」と言いました。今まで親子共々本当は思いっきり弱い人間なのに、思いっきり強がっていたのですね。

今回のことは、子供自身が小学校の6年間通っていた時に、たいへんお世話になった元さいたま

市立大宮南小ことばの教室の長瀬眞由美先生に教えていただき参加させていただきました。

多くの親御さんのお話を伺って、皆さん、子供さんの吃音に真摯に向き合い、勉強もされていて、このような集まりにも参加され…。私は今まで何もしてこなかった！と反省し、我が子ももっと楽な気持ちで、中高生生活を過ごせたのでは？？と思いました。参加させていただいて、本当に良かったです。できることならば、子供達だけの話し合いを開いてみたかったです。皆様ありがとうございました。

山口 裕子(八王子市立第四小ことばの教室教諭)

初めての参加でドキドキしましたが、スタッフや参加者の皆さんがとても暖かく、優しく話しかけてくださり安心しました。会は調理も話し合いもとても楽しかったです。

今回、つどいに参加したのは、自分が担当している吃音の子(現在中学1年生)に言友会を紹介したいと思ったのが一番大きなきっかけでした。担当している子は、自分の学校に吃音の子が他にいないことから「こんなに吃るのは僕だけなんじゃないか」と不安になったり、「他の人は中学校とか、新しい環境になった時どうしてるのかなあ」と疑問に思ったりする子でした。一緒に本を読んだり、他の子の体験を伝えたりしてきましたが、直接同じ悩みを共有できる仲間(特に先輩)と話せたらいいのになあと思っていました。だから、つどいの案内を見て、「これだ!!!ぜひ紹介しなくっちゃ!」とビ

びっときたんです。

残念ながら、その子は家庭の事情もあり、今回は参加することはできませんでした。でも、私が参加して感じたことを伝えて、今後また声をかけて一緒に参加できたらいいと思います。

つどいの会で、高校生・大学生のグループの話し合いの時に、その子の話をしたら、みんながうなずきながら聞いてくれて、とてもうれしかったです。詳しく話した訳ではないけれど、みんな同じように悩んだり、不安になったりしたことがあったんだと思います。担当している子に、「本当に分かってくれる仲間がここにいるよ」って伝えたいです。私は担当している子の吃音への思いや気持ちを聞くことや一緒に考えることはできるけど、本当に共有できる仲間がいるのはまた別格ですよ。

それだけでなく、高校生・大学生のグループの話し合いでは、いろいろな深い意見が聞けて感動しました。例えば、カミングアウトについて、それぞれが考えて「分かってくれそうな人には言う」とか「普通に接して欲しいと思うから、特に言わない」とかいろいろな意見があって、それらは、みんなが日常の中で(意識してか、無意識か)考えて、見つけた意見なんだと思います。ことばの教室の教員として、とても勉強になりました。

調理の時に同じグループだった D くん(小学 6 年)が「おれは午後の話し合いが好きなんだ」って話してくれて、子供にとってもすごく大事な時間なんだなと感じました。

つどいの会は、いろいろな思いや不安を安心して話すことができて、それを共有し合える空間で、それってすごいなと心から思いました。できたら次の会には担当している子も一緒に参加できたらいいなと思っています。

M. O(中 2 男子のお母さん)

子供達がみんな楽しそうでした。ことばの教室の先生、言語聴覚士の方、言語聴覚士をめざす方々、子供達、お母さんお父さんなど、こんなに多くの方々が参加されていて、遠方からの方もいらしてびっくりしました。

大人の話し合いは午前中の話し合いがもう少しあるといいと思いました。午後からはお菓子を作り

ながら、初参加のお母さん方と何気ないおしゃべりができて良かったです。話すことで気持ちが楽になり、同じ悩みを共有できるのはすごいことだと改めて思います。どなたかのお母さんがおっしゃっていましたが、どの世代も参加されていることで、子供達にとって身近な未来を見ることができるのは素晴らしいと思いました。

さて私事で恐縮ですが、対人関係で自分の吃音を隠すと私はロクなことはありません。この年になっても自分の吃音が出ないように…ばかりに集中し、話の内容に気を配れない時があります。吃音がひどい時なのに、ありのままの自分を大事にできなくて、またそんな自分に腹が立ち落ち込みます。

息子や娘はどんなにつっかえても自分のありのままにできるらしく、この頃は親が子供達から生き方を教えてもらっています。だんだん親離れしていく息子…吃音と上手に向き合い吃音をバネにして、でもどんな時もありのままの自分を大事にして、そして出会う人達を大事にして生きていく欲しいと思っています。大好きなお友達がいないくても、娘も是非次回は参加して、新しいお友達をどんどん作って欲しいと思います。



それにしても、スタッフの皆さんの優しいことといったら！いつもいつもありがとうございます。3月だったら参加できなかったのですが、延期していただいたお陰で!?参加することができました。

岡 奈々子(大学1年、目黒区東根小ことばの教室卒)

今回が、私にとって「参加者として参加する」最後のつどいになりました。小学6年の時のお料理教室からほぼ欠かさず参加し続けてきたので、何とも感慨深いものがありました。

ここ「中高校生吃音のつどい」の大まかな方針は、「吃音を治そう治そうと努力するのではなく、共に生きていくことを考えよう」ということですよ。間違っていたらすみません……でも多分そういうことだ、というふうに私は理解しています。

吃音をプラスに捉えるのはとても難しいことだと思います。何故なら、「プラスに考えよう」と意識しないことには、吃音のことをプラスに考えることはで

きないだろうと思えるからです。最初から「吃音って素晴らしい」と思うことができれば皆苦労しないし、そもそもこのような集いも存在しなかったでしょう。

前述のように私は長い間この集いに参加させていただいてきましたが、依然として吃音をプラスに捉えられるようにはなっていません。吃音がなかったらもっと実り多い人生を送っていたのだろう……というのは言い過ぎですが、これまで送ってきた日々はもう少し楽なものだったのではないかと、思います。

大学生になっても、新しく知り合ったクラスメイトや先輩の名前が呼べないわ、食堂で注文が言えないわ、自己紹介に時間がかかるわで、吃音にまつわる厄介事に毎日出会っています。汗をかくことこそありませんが、そういう場面に出くわす度に私は多少なりとも緊張し、口のまわりが強張ります。足で必死にリズムをとったり、落ち着こうと息を吸ったりして、声を絞り出します。それに成功できた時には、妙な達成感と共に、ほっと胸をなでおろします。

すると、ここでふと一つの疑問が持ち上がってきます。何故その程度のことを、自分は厄介だと感じてしまうのだろう？

名前が言えないとか注文が言えないなんて、他人から見れば「それだけかよ」で済まされてしまう物事だろうし、実際そうだろうと思います。そんなちっぽけなことではいちいち身構えて緊張するなんて、馬鹿みたいじゃないかと思います。その瞬間は恥ずかしかったりしても、相手は多分一日も経たないうちに忘れてしまうだろうし、自分もそのうち忘れてしまいます。喉元過ぎればというやつです。

でも喉元を過ぎる瞬間はとても熱い。自分が他人と同じように言葉を話せない、ゆえに相手の時間を余計に取らせて迷惑をかけてしまう、その事実の重みは、その瞬間だけは、巨大な存在感を持っています。自分と相手との間にある、さらさらとした、当たり障りのない流れのようなものに、自分が歯止めをかけてしまっている。そんなものは一瞬にして消えるものだとわかっている、そこに自分が作ってしまった「歯止め」が臉の裏にこびりついてとれなくなる。淀みない川の流れを、たとえ少しでもせきとめてしまったことへの罪悪感は今もなかなか

重いものです。他の人にとって、誰かとの間に作る川の流れは、それが深いものであっても浅いものであっても、とりあえず「さらっと流れゆくもの」という前提をたいてい持っています。自分は吃ることによって、その前提をぶち壊してしまう。相手はそんなことなど予想もしていないから、たじろぎ、目を丸くする。

それは、この世にいる「吃音の人」が「そうでない人」の数を上回らない限り、変わらないことなのではないかと私は思います。数の多い者が勝つようにできている世の中です。だからこれは仕方のないことだと思うし、私はそれでも良いと思います。

しかしこの世には、例外というものも必ず存在します。例外というのは、あった方が楽しいし、なければならぬものではないかと思っています。五十音表にも、最後に例外的な「ん」が、しりとりでとにかく忌み嫌われるこの「ん」という音があるからこそ、日本語はより豊かなものになるわけです。この世界にあって良い、むしろあるべき「例外」——この「中高校生吃音のつどい」は、吃音に関する物事の「例外」の一つと言えるのではないのでしょうか。

つどいに参加している方々の間を縫って流れゆく川は、他のそれとは少し様相が違います。そこにある流れは絶えず押しとどめられ、せきとめられ、分断され続けています。その流れ方はとても特殊で、さらさらなんていう小気味よい音は聞こえてきません。でもその川のほとりは妙に居心地が良い。その空間を包む空気が、何となく肌になじみやすい。うるさくないし、静まり返ってもいい。

ここで大事なのは、「川はさらさらと流れゆくものだ」という前提が、この川では大した意味を持たないということです。どちらかといえば、そこに水があること、それによって潤いを得るものがあるということの方に、より大きな意味があります。「他とは違った意味」というのは良いものです。「水がせきとめられること」自体を良しとできるほど、私は心が広くありませんが、でも、私はその川のほとりにいることが、その場所に集う人々が、多分好きなのだろうと思います。でなければ、多分六年間もここに通いつめることはなかっただろうと感じられます。



もしも私に吃音がなければ、この川よりもっと素晴らしい場所に行くことができたかもしれない。それはいつも思っていることです。でも、吃音がなければここに来ることもなかった。そこにある「特殊な流れ方をする川」の存在を知ることもなかった。

そこにある悩みや痛みに思いを馳せることもなかった。そう考えると、これもこれで良かったのではないかと今は思っています。この川の底を形作る「吃音」の全てを肯定することは、私には一生かかってもできないでしょうが、「全てを肯定できる物事」なんて、少なくとも今は、必要ありません。というより、そんなものはない方が良くと思います。「全てを肯定する」という言葉はとても胡散臭い。

とにかく、私は今までずっと、この川をふらっと訪れることをいつも楽しみにしていたし、これからできればそうありたいと思います。



神戸 梓（大学1年 群馬県富岡小ことばの教室卒）

今回が私にとって参加者としては最後のつどいになりました。振り返るととてもあつという間でした。参加し始めてからまだたったの3年しか経っていないのに、岡奈々子ちゃんみたいに随分前から参加しているように思えます。吃音のことで悩んで本気で高校を辞めようと思った高校1年の時から、2年、3年、卒業、そして進学、つどいのスタッフと、このようになったとはあの頃の私には全く考えられませんでした。今でもびっくりしています。こういう話を家族で笑いながら話せるようになったことは、私の中では少しの成長なのかなあとと思っています。

今まで生きてきた中で、とても辛い時に参加したこのつどいは私にとってとても大切な存在です。つどいに会って、同じ悩みを話せる友達、仲間がいたからこそ頑張れたのだと思います。本当に出会いは素晴らしいということをつくづく思います。これから、今まで以上に辛いことがあるかもしれませんが、乗り越えられると信じて頑張りたいと思います。そして、これからはスタッフとして皆さんのお役にたち、頑張りたいと思います。ありがとうございました。

富田 佐綾（スタッフ）

話し合いは、中学生グループの担当でした。一

番驚いたことは、久しぶりにお会いしたS. Kちゃんがとても生き生きした様子だったことです。お料理の時も楽しそうにしていたのですが、話し合いでも饒舌でした。自分から話すところはあまり見たことがなかったのですが、高校も楽しく通っているようで、本当に良かったと思いました。

印象に残ったのは、Sちゃん(中2)の発言です。以前、Sちゃんのおばあさんとお父さんが、本人には内緒で「吃音が治る」という内容の本を買ってきて、Sちゃんに薦めたことがあったそうです。しかし、Sちゃんは「吃音を治そうと思っていないだけに、2人の行動に対して悔しさを感じた。私は吃音を受け入れて、付き合っていく覚悟をしているのに」と思い、その本を読まずに捨てたそうです。この出来事はSちゃんにとって、とても悔しい経験になったそうです。私はSちゃんが「吃音と付き合っていく覚悟がある」と言ったときの力強い目が忘れられません。強い言葉と表情に圧倒されていました。吃音と正面から向き合った結果ではないか、と思います。

桜井 達也（スタッフ）

つどいに参加し始めて、今回が3回目。今回はご両親グループを担当しました。その理由は、保護者の方達が、自分の子供の吃音についてどう思っているかを聞きたかったからです。話を聞くと、これまでにこういうことで苦労したという話がたくさん出ました。

M. Oさんご自身も吃音のことも話してください、「吃音を隠していると良いことがない」とおっしゃっていました。その通りで、吃音を隠していると、なかなか言葉が出ない時、相手を苛立たせてしまいます。でも、相手に予め、自分はどうでも言葉が出ない時があると伝えておけば、相手もある程度は理解してくれるだろうし、自分も楽になるでしょう。しかし、僕も含めて、吃音をカミングアウトできない人はたくさんいます。理由は人それぞれですが、僕の場合、なんとなく恥ずかしい、障害者だと思われそう、言ったところで必ず理解してくれるとは限らない、などが挙げられます。

特に最後の「理解」というのが僕の中ではすごく大事なことだと思います。吃音を理解してくれる人

が多いほど、吃音者は気持ちが楽になると思います。僕の実体験から言いますと、高校時代、この症状は痙攣性発声障害かもしれないと思った僕は、その病気の手術経験がある医師のもとを訪ねました(親には内緒で)。いろいろ、検査した結果、痙攣性発声障害ではなく、吃音だろうと言われました。その時、医師から言われた一言が僕の心を傷つけました。「どもりなんかでそんなに悩むことはないよ。あと、君は自分が気にしてるほどどもってないから」とあっさり。当時、吃音で深く落ち込んでいた僕は、帰り道に何度も涙をこらえました。あの時、嘘でもいいから、「どもりは辛いよな」と言ってくれれば、少しは気持ちが楽になったかもしれない。つどいに参加してる小学生や中学生は自分から吃音のことを話しているというのが何人かいるみたいなのですごいと思いました。

僕の家庭では吃音の話はタブーみたいな空気でした。なので、僕は言友会に来るまではずっと一人で吃音を抱えていました。一番苦しかった高校時代に吃音のことを親に話せていれば、少しは楽だったと思います。話し合いの中で、僕が「(親には)もっと吃音に触れてもらいたかった」と言ったら、初参加のR.Aさんがすごく共感してくれた？ので、妙に嬉しかったです。保護者の方達は、苦労しつつも、子供の吃音を優しく見守っている良いお父さん、お母さんだなあと思いました。

料理のことですが、ブラマンジェは試作会の時よりもおいしくできたんじゃないかと思います。プリンもうまかったです。生姜紅茶は残念ながら不評でしたね…(苦笑)。砂糖をもっとたくさん入れて、小学生にも飲みやすくすれば良かったのかなと思います。

これからつどいに関わって、自分の吃音と向き合っていきたいと思います。

A. N (スタッフ)

今回全くの初めてで、スタッフとして参加させていただきました。と言いますのも、言友会の存在は3~4年前に知ったのですが、なかなか踏み出す勇気がありませんでした。やっと今年の3月に言友会に繋がることができ、この会に



参加することが出来ました。スタッフは同世代の方が多いと聞いて、実は同じ悩みを持った方とお友達になれるかもしれないと思い、参加することにしました。

当日私は親グループに参加させていただきました。私はいろんな気持ちが湧き上がり、考えさせられました。なぜなら、初めて吃音であるお子さんを持つ親御さんのお気持ちを知ったからです。親御さん方は本当にお子さんのことを想っていて、お子さんのためにいろんなことを考えてサポートされています。そして何より、**吃音当事者である本人も辛いけれど、それを見守る親御さんが抱えるものがある**ということを知り、心が打たれました。

私の母は私が吃音であることは知っていますが、親子では吃音の話をはほとんどせずにここまで来てしまいました。私がずっと悩んでいることを知っていたかどうかともわかりません。普段は過保護ですが、吃音のことだけは触れないのです。不思議ですし、両親が私の吃音をどう考えているのかもわかりませんでした。だから親のグループに参加していろいろ考えさせられたのです。

そのため、親グループの中で、「もっと早く中高校生のつどいに参加すれば良かったという思いも湧いてきて、どこかで私も母と一緒に抱えて欲しかったんだと気が付きました。悩みを打ち明ける勇気を持つのも、「吃音」という言葉に出会うのも遅かったようです。

母は不思議なくらい吃音に関しては触れません。ここまで大きくなってしまうと、どのタイミングで話したらいいかわからないです。今日の集いも適当にごまかして来ています」といったことを発言しました。

すると、ある親御さんから、「あなたがお母様にお話しするタイミングがわからない、と感じているのと同様に、お母様もどうやって吃音のことに触れたらいいかわからないんだと思うの。だから、ここはあなたからお話してみたら？」と、アドバイスをいただきました。それを聴き、私は「確かに！」と納得し、今までどんなに辛くて、実は中高校生のつどいや言友会の活動に行き始めたことを母に打ち明けようと思えました。

さらに私は、「どうして私が親に吃音で悩んでい

ることを打ち明けられないか考えてみました。その理由は、ここまで育ててくれたのに、私は『吃音』という欠陥がある子供で申し訳ない、という罪悪感のような気持ちがあるからだと思います」と言いました。

そうしましたら親御さん方が次々に、「それは違う。親からすればこんなふうに生んでしまって本当にごめんね、辛い思いさせてごめんねって感じです。娘であるあなたがそんな罪悪感を感じる必要は全く無いよ。親はあなたが思っているようなこと思わないし、考えないよ」そんな言葉をかけてくださいました。とても嬉しかったです。スタッフとしてその場に参加していたのに、親御さん方に励ましてもらい、アドバイスまでいただいてしまいました。心より感謝しております。ちなみに実際に母に打ち明けました。

また、小中高生の皆さんの一生懸命で真っ直ぐな姿に涙腺がゆるみました。辛いけれど、向き合っている姿がありました。本当に立派です。その姿を見て私は、言友会にも中高校生のつどいにも繋がらなかったのは、自分が今まで吃音とちゃんと向き合わずどこかで逃げていたのかもしれない、と気付きました。成人になる前に、このような場で仲間に出会えている子供達が羨ましくも思い、一生の宝物になるに違いないなと思いました。でもそれは、きちんと吃音と向き合ったことへのごほうびなのかもしれないな、とも思いました。

今回、小中高生の皆さんと直接関わる機会が無かったので、どんなことを感じて、どんなことが辛くて、でもそんな中どうやって過ごしているのかと言った声を聞くことが出来なかったのが残念でした。なので、また次回も参加したいと思います。

今回はわからないことだらけでしたが、次はもう少しスタッフとして働けるよう頑張りますのでよろしくお願い致します。

近況 H.Y君(小6)から

小学校生活最後の運動会で、息子は応援団長をつとめました！「初めの言葉が出にくい。(←竹組なので苦手な「タ」の音から始まるんです・・・)練習でもどもっちゃうし、本番うまくいかなかったらどうしよう・・・」と毎晩不安を口にしていたのですが、延

期になった昨日、大きな声で立派に応援合戦をしていました。しかも息子の組が優勝し、校長先生から優勝杯を授与され、全校の中で1番目立つことに！沢山のお母さんたちから、「最高にかっこよかった！感動して涙が出たよ」と言われ、私も本当に嬉しかったですし、何よりこの経験が大きな自信にもつながったと思います。吃音のことで数か月前にはつらい思いをしたことが続いたので、私としてもとても嬉しかったです。



「吃音克服への道標」

きよのぶ
高島 聖宣

最初に僕のことを知らない方が多数だと思うので、簡単な自己紹介をさせていただきます。昭和59年生まれの僕は現在26歳です。生まれも育ちも東京で、今は通信大学に通いながら教員を目指して勉強をしています。東京言友会には2年ほど前から参加しています。僕が吃音になったのは小学校1年生ぐらいのときでした。吃音の一番古い記憶としては、ある日家で「猫踏んじゃった」を歌っているときにふとあることに気づいたのです。それはメロディに乗せて声を出すと普通に歌えるのですが、歌詞をそのまま声に出すと、どうしても「ね、ね、ね、ね、ね、ねこ、ふ、ふふんじゃった」となってしまうことです。それから僕はこの吃音と20年以上付き合っています。吃音の多くの方が体験されているかと思いますが、小学生の頃はよく周りの同級生たちからからかわれたりもしました。「どうしてそんな話し方なの？」といった言葉から「お前って身障じゃねーの」というきついことなども言われました。

そんな自分が吃音であることで起きたことで今でも忘れられないことが二つあります。その1つ目としては僕が中学2年生の時です。国語の授業で太宰治の「走れメロス」を扱った時に、班ごとに教室の前に出て一人ずつ音読をするということをしました。吃音の多くの方は音読が苦手と聞きますが僕も漏れなく音読は苦手です。教室の前で音読するというただでさえ緊張する音読が、この時はいつも以上に心臓が高鳴っていました。そして僕の班になり、僕の番になり、どもりながらつかえながらもなんとか音読を続けていました。しかし、ある行にきた時に、その最初の一文字がどうしても口から出て来ないのです。1分ぐらい沈黙が続き教室も

ざわざわしてきました。それを見た先生がクラスのみんなに静かにするように言ってくれましたが、それを聞いた同級生の1人が「だってこれ日本語ですよ?」と言ったのです。それを聞いて僕は自分の母国語すらろくにしゃべることができない人間なのだと思います、とても強いショックを受けました。

2つ目は、高校生の時に、好意を抱いていた同級生の女の子と付き合うことになりました。しかし、そこで自分の中で問題になってくるのが吃音という症状でした。多感な時期だった当時の僕は、この吃音という自分の弱い部分をどうしてもその子には知られたくありませんでした。そこで考えたのが吃音がばれないように、その子の前で喋らないようにしようという今考えたら非常に的外れなものでした。しかし、そんな関係が上手くいくはずもなくしばらくしてから、振られてしまいましたが、その時に言われた言葉が今でも忘れられません。それは「だって喋らないんだもん、何を考えてるのかわからないよ」という内容でした。

その2つのことは僕の中でつらい思い出としてあります。しかし、言友会や中高校生のつどいなどに参加しだして、ただ辛かったということだけにしては何も変わらないという想いが湧き上がってきました。高校生のときに吃音を隠してふられてしまった女の子に対して、正直に自分の吃音のことを話していれば、もう少し違った結果になっていたのかもしれない。ここで大事なことは人に対して吃音のことを話し、受け入れてもらうことで、自分自身が吃音を受け入れることができるということです。僕の考えとしては、吃音が治っても治らなくても自分自身が納得できる素晴らしい人生にしていきたいというものがあります。そのためにはまずあるがままの自分を受け入れることからすべては始まるのだと思います。

映画「英国王のスピーチ」感想募集

言うまでも無く、2011 年度米アカデミー賞4部門受賞作品(作品賞、脚本賞、監督賞、主演男優賞)です。そして我々同様、吃音を持ち悩み、しかしその中でも、自らの生きる道を見出していった英国王ジョージVI世の実話に基づく映画です。第 2

次世界大戦下、独ナチスによる激烈なロンドン空襲に対しても、吃音を持つ国王のスピーチが英国民を鼓舞したとされています。今もロングラン中です。

そしてその一部を英訳して、吃音の脚本家デビッド・サイドラー氏、トム・フーパー監督(映画パンフレットにあるインタビュー記事も素敵です)、コリン・ファース氏(どもる役をまじめに丁寧に演じてくださっています)にも、お送りできればと考えています。感想を下記まで。

1600 字以内、7月末締切。

E メール ア ド レ ス :

tomoyank@aol.jp



「家族の絆」

菊地 利江(スタッフのお母さん)

正直な気持ち、期待していませんでした。「克服」という単語は好きじゃないからです。娘の通級指導教室時代から、言友会にお世話になり中高校生の吃音のつどいで出会った親御さんたちとの語らいの中で培われていった数々の感情があります。それらの経験が「吃音の克服」との表現を違和感に育てました。「英国王のスピーチ」の宣伝の中で克服との単語を見つけてしまいました。私は距離を置いて観る羽目に陥ってしまったのです。

しかしながら、この映画は私に感動を与えました。色眼鏡で観始めた私が身を乗り出して、一気にジョージ六世にひきつけられていきました。彼は吃音を「たくさんの欠点の一つ」とおっしゃいました。奥様が転職を勧められた場面では、心置きなく笑えました。

王族も、私の家族も、原点は同じなのだと教えてくれました。支えは家族であろう。父君であられるジョージ5世に叱責され。マイクに向かう息子を不甲斐ない目で見える父を感じながら育つ次男。王族でありながら劣等感にまみれ、自分は認められていない存在だと思い込む。後に父君の真の言葉を人を介して聞き、背中を押されることとなる次男。長男が王族を去ることなど、毛頭念頭に無かった次男が王位を継ぎ、やがて愛される国王となることは、父君の賞賛がなかったら有り得たでしょう



か。吃音者に限らず誰しも、家族は原点です。兄弟げんか等で理不尽を味わい、親からの叱責で欠点を知り、学校等で育つ心。将来、社会に出たときに糧となる経験の出発点は家庭です。人が育つ過程において、基盤となり支えとなる家族の存在は、王族といえども同じなのだと思います。親の叱責は必要であり、称賛も不可欠であり、真の友人もありがたい。

私は吃音者の母であり、当事者ではないのと言い切れませんが。「吃音の克服」は必要じゃないと思えるのです。ジョージ六世も吃音を克服していませんでした。パンフレットに書かれているように「自らを克服し」だと。エネルギー源は父君の言葉、妻の行動、娘達の存在。ジョージ六世にとってかけがえのないものだったと。

「英国王のスピーチ」は、私にたくさんの事柄を教えてくださいました。そして、今まで思い描いていた私の信念を、示唆してくださったと思います。

.....
後記 ・インターネットや本で、吃音が治る…という宣伝文句で、書かれてあるものは、まず間違いなくと言って良いほど、お勧めしません。一次的に軽くなることがあるだけで、吃音に対する向き合い方、受け止め方が大事なのですが、それらはおざなりなままで、問題の本質は何ら解決されていません。症状はぶり返し、治っている訳ではないのです。本人が何か合わない、やりたくない…と感じていることは、やらないことが正解です。

・クラスで、どもるとはどういうことか？説明しよう。分かっている日本語でも、緊張したら声が出ない。簡単に症状が治るようなものでもない。英国王はじめ大人もどもりと共に生きている、と。(たかはる)